

映画の小箱

1920年代のN.Y.、44丁目。
アルゴンキン・ホテルを舞台に、
華やかな時代の空気を体現した
1人の女性の愛と孤独を描く

『ミセス・パーカー』 ホテルからいつも ドラマが生まれる

金丸弘美=文
text by Hiromi Kanamaru
坂本 照=写真
photograph by Akira Sakamoto

旅にもちろんホテルはかせないけれど、こんなホテルの使い方があったのだと、うらやましく思わされたのが、『ミセス・パーカー』でのアルゴンキン・ホテルだ。

この物語は一九二〇年代のニューヨークを舞台にしたジャズエイジといわれた時代の作家であり詩人であったドロシー・パーカーを描いたものだ。とはいっても登場する場所は、彼女が仲間と語らい、恋をし、そして創作の場所ともなった、アルゴンキン・ホテルがほとんど中心で、ホテルがもうひとりの主人公といっても差し支えないだろう。

ミセス・パーカー（ジェニファー・ジェイソン・リー）の「二〇年代は輝いていたわ」という言葉から話は始まる。語りはモノクロで、彼女が脚本家として執筆活動をし、二人目の夫アラン・キャンベル（ピーター・ギャラガー）と暮らした一九三七年のハリウッドから始まる。彼女の語りは、常に詩という形式が取られ、時代は次第に晩年に向かっていく。モノクロの語りに挿入される回想はいつも一九二〇年代のアルゴンキン・ホテルに仲間が集った日々、しかもカラーになる。それだけ一九二〇年代が、彼女自身にとって最上のものであったのだろう。

一九二〇年代。戦地から帰った夫をパーカ

ーはニューヨークで迎えた。だが、彼女の頭の中は、物を書くことではない。夫は戦争中に麻薬を覚えたらしい。やがて彼女の心は次第に夫から離れていく。

『ヴァニティ・フェア』のコラムニストとして働いていた彼女だが、コラムが不評でクビになってしまった。不安になった彼女は、当時劇評家でコラムニスト、後に脚本家としても活躍するロバート・ベンチリー（キャンベル・スコット）に相談する。彼女の心の安らぎは夫ではなく、同じ創作活動をするベンチリーだ。しかし、ベンチリーには妻子がある。それでも彼女は、いつもベンチリーを必要とした。彼女にとって彼は創作の鏡であり、かけがえない友人でもあった。

やがて彼女は夫と別居。一時は劇作家・脚本家として名を馳せたチャールズ・マッカーサー（マシュー・プロデリック）と恋仲になり妊娠し中絶。自殺未遂までするのだが、やがて立ち直り、仲間励まされながら、創作活動を続けていくことになる。そして、詩人として、脚本家として頭角を表していく。

恋、詩、仲間、創造、生きるということ、それらが、アルゴンキン・ホテルを中心に回転していく。彼女にとって、すべては、ホテルでの仲間のサロンが原点なのだ。

アルゴンキン・ホテルは、マンハッタンの四四丁目の五番街と六番街の間にあるホテル。

『ミセス・パーカー／ジャズエイジの華』

(米・松竹富士) MRS.PARKER and the vicious circle 1994年

監督=アラン・ルドルフ

出演=ジェニファー・ジェイソン・リー

キャンベル・スコット/マシュー・プロデリック

アンドリュース・マッカーシー

マーサ・プリンプトン

9月中旬より、東京・渋谷シネパレスにて上映

アルゴンキンとは、インディアン部族の名前から取られたものだ。ホテルは、こじんまりしたところで、今も、昔のたまたまそのままに残っている。客室は二百と少ないが、内部の木造の作りは妙に落ち着く。二階のロビーでは、いつもホテルマンがいて、声をかけるとお酒もすぐに運んでくれる。くつろぎやすい雰囲気なのだ。それはきっと、映画の舞台の一九二〇年代のものなのだろう。だから、ここから、さまざまな伝説が生まれてに違いない。

実際、パーカーを始め、テネシー・ウィリアムズ、ジョン・アップダイクなど多くの作家たちが利用し、このホテルで書いた作品はヒットするというジンクスも生まれた。

ホテルが、作家や編集者や役者のサロンになっていて、さまざまな人々が集い、語らい、伝説が生まれた時代が再現される。みんな気軽にレストランにやってきて、まるで、自分

たちの部屋みたいに語らう。そのうちに人が増えはじめ、備え付けのテーブルだけでは足りなくなり、いつも接客をするホテルマンは、ふとひらめいて大きな丸テーブルを用意することを思いつく。それがやがて、円卓の騎士に例えられ、そのテーブルに着くことが、みんなの誇りみたいになっていく。

円卓でみんなでクロワッサンを食べ、ワインやコーヒを気軽に飲んで、夕方にレストランに変わるまで、みんな入れ代わりたちかわりしては、談笑する。しかも、ホテル側もおおらかにそれを許している。その光景のなんと素晴らしいこと。

時代と集まった才能の触発と開花が、見事にマッチしたときがあったのだ。そこには、来客を気軽に受け入れるホテルという素晴らしい器があったことを知らされるのである。

